

# 東方自由遊戯

影付き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

フリーホラーゲームの世界からキャラ達が消えていった。彼らが消えていった先は忘れ去られた者達の楽園、幻想郷だった。元の世界に帰ろうとする者達もいるが今幻想郷は異変の真っ只中!!? 彼らは無事に元の世界に帰れるのだろうか？

# 目次

第一話	始まりの打者	1
第二話	暴君と紅魔	5
第三話	幻想とルール	12
第四話	再会の商人	18
第五話	幻想入り人物 (off)	24
第五話	厄日	28
第六話	虚ろと狂気	34



# 第一話 始まりの打者

「the roomスイッチ前」

「これでこの世界は浄化される」

この世界の浄化者であるバッターは先ほど闘い血溜まりに横たわる白猫ジャツジを見ながらふと呟く。

「俺をここまで導いてくれた事には感謝している。」

静かにレバーを握りもう一度ジャツジを見ると今まで闘った者達のようにジャツジの姿はそこからいなくなっていた。バッターはその事を確認した後、レバーを落としバッターの視界は闇に包まれた。これで終わりだとバッターが思った次の瞬間聞き慣れない女の声が後ろから聞こえる

「あなたがこの世界の主人公ね」

バッターは持っていたバットを後ろに振ると同時に話す者の姿を見た。その者は時空の裂け目のような物の上に乗るバッターを見ながら笑っている。

「何者だお前はこの世界には俺以外の生物はいないはずだ」

バッターの問いに対し女性はい

「私は八雲紫、此処とは別の幻想郷とゆう世界の住人。私がこの世界にいる理由はあなたを幻想郷に招待しようと思ったからなの。ところであなたの名前は？」

「八雲紫と言ったな。俺はバッター、浄化者だ。しかし何故俺をその幻想郷に連れて行くかと思った？」

バッターは不気味な笑みを絶やさないう紫に対して少しイラつきを見せながら質問を投げかける。その質問に紫は

「あなたがあなたの世界を浄化した事で生物は消え誰一人としてあなたを知っている者はいなくなつた。幻想郷は忘れ去られた者達が集まる場所だからあなたを迎えに来たのよ」

そう言うと同時にバッターの足下にも割れ目か出現し中に落ちて行く。その間バッターは紫が

「幻想郷は全てを受け入れる。あなたの存在を受け入れられますわ」と言つたように感じた。しばらくするとバッターは草木が生い茂る場所で横になっていた。ひとまず起き上がり周りを見渡すとアドーオン達が地面に突き刺さっているのを見つけ引き抜こうとする。

その瞬間茂みが揺れ金髪に赤いリボンを付けた子供がバッター目掛けて飛び込んできた。しかしそのスピードは子供のものとは到底思えない速さだったがバッターは間

一髪てそれを避ける。

「あなたは食べていい人間なのか」

少女はそう聞きながら次の攻撃の体制を取り襲いかかる。バッターはそれをバットで防ぐがその衝撃に双方とも後ろに飛ぶ。

「なんだこいつ、バーストや悪霊どもと同じいやそれ以上の力を持っている。油断しているところちがやられちまう」

そんな事を考えながらも少女にバットを振り続ける。

それを避けながら少女はカードを一枚取り出す。

月符「ムーンライトレイ」

そう叫ぶと同時に少女の周りから光弾とレーザーが発射される。

バッターも自分の大技である「マジックホームラン」を空に浮かぶ少女に向けて打ち込む。お互いの技がぶつかり相殺する。お互いに力を使い果たし地面に座る。少女は、

「おじさん強いのだ」

とバッターに言うとお腹を抱えながら不満気に下を見ている。そんな少女に対しバッターは、

「お前は何者だ？何故俺を襲った」

と聞く。少女は

「私はルーミア、妖怪なのだー。おじさんを襲ったのはお腹が空いててたまたま人間があそこで寝転んでたから食べようと思ったのだー」

理由を聞いた後、バッターも先ほどの鬨いで自分も腹が空いている事に気がついた。

「こんなところでザツカリーのところで買って余った肉が役に立つとわな」と懐から黄金の肉を取り出し一枚をルーミアに渡し話を続けた。

「ルーミア一つ聞きたいのだがさっきの光弾はなんだ？」

そう聞くとルーミアは

「さっきのは弾幕といって妖怪と人間同士でも遊べる遊びなのだー」と答える。「ところでおじさんは何て名前なのか？」

「俺はバッター。浄化者だ。年齢はまだおじさんじゃないからな」

そう言った話をしルーミアから幻想郷についての事 帰るには博麗神社に行く事などを聞きく事が出来た。ルーミアに別れを告げバッターは

「博麗神社に行ってみるか」と次の目的地に向かって歩き始めた。



## 第二話 暴君と紅魔

（バッターが博麗神社を目指す数日前）

此処は紅魔館、2人の吸血鬼とその従者達が住む霧の湖の近くに建てられた巨大な館である。その門番である美鈴は暇で居眠りをしていた。そんな美鈴に忍び寄る影があつた。鋭い飛行音と共にナイフが美鈴目掛けて飛んでくる。

「うわあああ、すいません もう居眠りしません」

美鈴に飛んできたナイフの持ち主は紅魔館のメイド長である十六夜咲夜であつた。

「もう今日だけで10回目よ、美鈴」

そんないつもどりの会話をしているとむこうから何者かが二人に近づいて来る。

「美鈴誰か来るわよ」

「さすがに人には見えませんね、咲夜さん」

二人に近づく者は人というには異常なまでに発達した歯と巨大な筋肉を持つていた。

☒? 「いったい此処は何処なんだよチクシヨウ あのニヤニヤ野郎に殺されてから虚無の底に落ちてヤフェト達といたのは覚えてるんだが…」

その人物は乱暴な口ぶりで呟き続けている。

「その妖怪？止まりなさい」

「アアッ」

咲夜の呼びかけに対してもまた乱暴な口調で返す。

「この紅魔館に何の用ですか」

美鈴の問いに対し巨大な怪物は、

「どうもこうもいつの間にかこんな所に居たんだよ」

と答え二人を見る。そして咲夜を見て彼は自分を殺し、自分の愛する zone を壊した忌々しいあの男に雰囲気似ていると思いき軽く睨む。余裕を持った顔に一発御見舞いしてやりたい気持ちを抑え、今度は逆に質問を試してみる。

「此処はいつたい何処なんだ」

「此処は幻想郷、そしてこの場所は吸血鬼であるレミリアお嬢様のお屋敷です」とゆう美鈴の答えに対し彼自身も此処が元いた世界でも死後の世界でもない事は分かっていた。しかし彼が気になったのは吸血鬼という言葉だった。

「zone 2 の図書館に用事で行った時にたまたま読んだ本にそんなのってたな、強いのか？」

そんな事を考えながら咲夜に対し、

「そのレミリアで奴と戦わしてくれ」と聞いてみる。

そんな質問を聞いた咲夜は笑いながら

「貴方みたいな者がお嬢様に勝てるわけないでしょう」

と返される。その言葉は彼の闘争心に火を付けるには十分だった。

「俺はてめえのゆうお嬢様なんかよりは強えよ」と軽く挑発してみる。

その誘いに見事と言えるくらいに咲夜は乗った。

「貴方私によほど殺されたいようね」

そんな一触即発の空気の中、美鈴は二人のプレッシャーに押されて黙り混んでしまった。本来なら近接戦闘に長けた自分が出るべきだろうが、そんな事を言えばすぐ額にナイフが飛んできそうなほど咲夜は怒っていた。

そして戦いの火蓋は切って落とされた。

「俺の名前はデーダン、てめえをぶっ飛ばす男の名前だ」

「それはご丁寧に、私は十六夜咲夜……まあ覚えなくていいわ、すぐに何も分からなくなるから」

そういうと同時にデーダンの周りに大量のナイフが出現する。デーダンはそれをその巨体からは想像できないスピードでかわし、避けきれないものは自慢の筋肉を振り弾き飛ばす。

「こんな手品で俺を殺せるかよ」

といい時計の針をモチーフにした長針を投げつける。

咲夜は自身の能力「時を止める程度の能力」を使用し回避しようとするが止まった時の中でもデーダンの針は咲夜に向かつて飛び当たる寸前のところで動きを停止する。それを避け、今度はスペルカード、メイド秘技「殺人ドール」を使用するが、デーダンはそれを捌きながら少しずつ咲夜に近づいて行く。咲夜はその中で違和感を感じる。その訳はデーダンが叩き落としたナイフが柄の部分だけになっていた。まるでそれは長い年月により風化したようだった。

デーダンは咲夜の前まで進むとその巨大な拳を振り咲夜の腹部に一撃が入った：はずだった。その一撃を美鈴が受け止めカウンターを決めていた。

「咲夜さん無理しないでください」

「無理はしてないわ。けれど、あいつの触れた物は何故か風化している。まるで彼の周りだけ時が加速しているみたいに……」

デーダンは美鈴のカウンターをくらい数秒の間だけ気を失っていた。

「あの女、俺に一発入れるだけじゃなく的確に急所を狙ってきやがった」

「気絶したのなんてガーディアンズで筋トレやった時のイーノックの大技やあのニヤニヤ野郎以来だ」

デーダンは死んだ後虚無にいた頃を思い出していた。自分が死んだ後の世界、虚無に

落ち消えていく部下達、その時の痛みには比べれば肉体への痛みなど感じないも同然だった。

「クソがあ」

「まだ立てるのですか☒」驚きを隠せない二人に対しデーダンは

「あの時のようにはしねえ。もし生き返れたら今度こそ世界を守る、そうクイーンに誓って修行を積んだんだ」

デーダンの持つ意思の強さ、威圧感、それらは巨大な彼を二人に更に大きく見せていた。もう体力も底を尽き掛けていた二人にとってそれは絶望的な状況だった。しかしデーダンは動かない。彼は咲夜との戦闘中、終盤からは気力だけで戦っていた。

「咲夜さんこれどうします」

「とりあえず運びましょうか」

く少女移動中く

デーダン「んっ…何故ベットのの上にいる」

「あら休まして貰つといてそんな事を言うのね」

デーダンは起きた自分に話しかけた相手を見る。そこには年齢は12く3ほどの少女が咲夜の横で座っていた。

「私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ」

「思ったより小さいんだな」

デーダンは自分が思ったそのままを返す。

「まあこう見えても500年生きてるけどね」

「そんな事よりもあなたについて教えてくれない？」

「教えるたつて何を教えればいいんだ」

「あなたが元々いた世界について知りたいの」

「わかったよ」

〈守護神説明中〉

二人はデーダンの過去に驚愕する。

貧しい生活をしていた彼は、彼の主人「クイーン」に世界を任せられ苦勞の果てに作り上げた世界も浄化者と名乗る男によつて壊されてしまったのだから。彼の心残りには部下達に厳しく当たつてしまった事だという事も。

「デーダン…」

「なんだ、レミリア」

「よかつたら、うちで働かない？」

「始めと随分態度が違うな」

「さすがにこんな話聞いたらね…」

「他にこの世界で住むところないでしょ」

(数十分の相談によりデーダンは紅魔館の門番として美鈴と働くことになった)

## 第三話幻想とルール

↳博麗神社↳

ルーミアと別れて約数時間、バッターは目的地である博麗神社に到着する。

「ここがルーミアの言っていた場所か…。確か巫女がいると聞いていたがどこにいるんだ。」

バッターは鳥居を通り周囲を見渡す。しかしそこにあるのは年季の入った賽銭箱と神社、木の葉一つ落ちていない石畳だけだった。

「誰一人とこないな…」

バッターは賽銭箱に近づく。その時の神社の裏から声が聞こえる。

「素敵な賽銭箱はそこよ、有り金全部入れなさいよ」

バッターは声のした方に行ってみる。するとそこには縁側に座り、緑茶を啜る少女がいた。

「お前が博麗の巫女か…?」

「そうだけど? 賽銭箱はあっちね」

「元の世界に戻して貰えると聞いたのだが」



「なんだ、外来人か。取り敢えず事情だけ簡単に聞かせて」

　　（説明進行中）

「なるほど紫連れて来られたわけね」

「まあそういうわけだ。」

「そういう理由なら多分私じゃ無理ね」

「何故だ？ルーミアの話じゃ帰れると言っていたが…」

「私が出るのはあくまで幻想郷の外の世界に帰すこと。つまり貴方はその世界の住人じゃ無いからよ」

　　バッターにとつてその話はよく分からなかった。いくら消えている世界といえど虚無には帰れるはずだ、という考えだった。

「貴方の話を聞く限り貴方の世界は浄化…つまり消えている世界なわけ、もし貴方の世界が幻想郷の外の世界なら幻想郷も同様の事が起こってもおかしく無いからよ。」

「つまり俺は戻れないという事か」

「貴方を連れて来た奴なら出来るだろうけど、最近あんまり見ないからね」

「そうか…」

「暫くはこの世界で暮らしたら？」

「そんな場所があるのか？」

「人里の空き家に住んでも文句は言われないでしょ」

「お前の発想が怖い」

取り敢えずバツターはもう少し聞きたい事を質問する事にした。

「ルーミアが光弾を撃つていたんだがあれは何なんだ？」

「あれは弾幕で言つてこの世界の決闘のルール」

「霊夢く〜居るか〜」

霊夢の説明は上空から聞こえた大声によつて掻き消される。

降りてきた少女は黒い服に黒い帽子をかぶり、箒を持っていた。まさにその姿は魔女のようだった。

「凄いもの持ってきたぞ」

「魔理沙今この人に説明してるんだけど」

「食べ物だぞ」

「寄越せ」

そんな事を言い合いながら魔理沙と言われた少女は霊夢に質問する。

「何の説明をしてんだ」

「弾幕ごっこについてよ」

「ほう… その奴」

「俺か？」

「お前以外誰が居るんだよそうじゃなくて実戦しながら学んだらどうだ？そっちの方がわかりやすいぞ」

「なるほど」

「魔理沙飯」「そうだったな、ほら」

「紙じゃない」

「それ食ったら腹膨れたしパチュリーの本盗る時出来た傷治ったんだぞ、美味かったし」  
バッターはその紙に見覚えがあった。しかし今はそんな事を気にしている場合でない事を悟る。

「弾幕ごっここのルールは簡単、相手の光弾を交わしていくんだ、その他にも弾幕の美しさや回避のうまさを競ったりするんだ、当たったら負けだぞ、それじゃやってみるか」  
「よろしく頼む」

互いに戦闘態勢に入る。先に仕掛けたのは魔理沙

恋符「マスタースパーク」

魔理沙が持つ道具から巨大なレーザー射出される。バッターも自分の得意技を放つ

「怒りのホームラン」

バッターのバットから巨大な打撃が振り落とされる。

お互いに攻撃を回避し次の技を唱える。

魔符「ミルキーウェイ」

バッター「マジックホームラン」

二人の技はぶつかり合い相殺した様に見えた…しかしバッターのアドーオンの体当たりをくらい魔理沙は下に落ちる。

「何なんだよ、今のリング」

「こいつはアドーオンと言って俺の相棒だ」

「変わってるな、お前」

「取り敢えず実戦出来て良かった。」

「またいつでもやろうぜ」

バッターは先ほどから気にかけていた質問をする。

「さっきのチケットどこで手に入れたんだ」

「何でそんな事聞くんだよ？」

「あれは俺のいた世界のとある商人が取り扱っていたものだ、あいつか俺ぐらいしか持っていない」

「なるほどな。たまたま知り合いの店から盗って…貰ってきたんだ」

「確かお前に似た奴がいたな… H A H A H A て話しかける度に笑ってたし…紅魔館の

門番の所には凄くデカイ大男が出たて聞いたし」

「そいつは仮面を被ってなかったか？」

「被ってたぞ カエルみたいなやつ」

「詳しく話を聞かせてくれ……」

（少女説明中）

「そいつは俺の知り合いだ、よくわからない事を言ったりしてたがいい奴だった……次に行く場所が二つも出来たな」

「一つは香霖堂、もう一つは紅魔館だ。けど先に人里に連れてってやるよ」

「よろしく頼む」

「紫の奴が来たらまた言っとくから」

「すまない」

こうして魔理沙とバッテリーはひとまず人里に向かって行った。

## 第四話 再会の商人

（人里）

バッターは魔理沙と話しながら目的地に向かっていた。

「まずはあいつに話とかねえとな」

「上白沢慧音だった？」

「そうだけ。あいつ人里の警備と寺子屋の教師やつてるからな。あんたが夜怪物に変身するタイプの外来人なら確実に頭突き飛んで来る。」

「怪物か…」

「なんか言ったか？」

「なんでもない。ところで寺子屋は何処にあるんだ」

「あああそこだけ。今里の子供達に挨拶してる」

魔理沙が指差す場所には子供に話しかける青い服を来た女性が立っていた。

「おーい慧音少し話があるんだがいいか？」

「少しなら大丈夫だ」

「新しい外来人だ。今日から人里の空き家に住まわしいらしくてな」

「バッターだ。よろしく」

「ああよろしく頼むよ。私は慧音この寺子屋の教師をしている。何かわからないことがあつたらまた来てくれ。満月の日以外なら空いてるから」

「それじゃあ言つてた奴に会いに行くぜ」

「気をつけてな、最近見慣れない妖怪や亡霊が出るらしいから」

「安心しろ。俺が見つけ次第〃浄化〃してやる」

「無理だけはしないでくれよ」

「バッター置いて行くぞ」

魔理沙に急かさされバッターは人里の外を指す。

「元々この世界に亡霊の類が出るのか？」

「まあほとんど雑魚か人畜無害なんだけどな、最近じゃ外来人の首が取れて黒い液体が吹き出して襲つて来たなんて噂聞くくらいだし外から来た悪霊か何かだと思つて」

「そうなのか」

「もうちよつとで着くぞ」

く魔法の森く

「結局亡霊には出会わなかつたな」

「人里の近くにはよつぽどの新参者か古参者しかいないから警戒してるんじゃないか。

とりあえず目的地のある森までついたらぜ」

「随分と暗いな」

「妖怪すら近づかずに長く住み続けると魔力に目覚める事もある森だ。私の家もここにある、んでそこが香霖堂だ」

「入ってみるか。」

☒? 「いらつしやい」「H A H A H A ここにも客は来るもんだな」

店らしき建物の奥には銀髪の男とカエルの仮面を被った商人がいた。銀髪の男は香霖堂の店主、霖之助、仮面の商人は「ザツカリ」である。

「久しぶりだな、ザツカリ」

「バツターじゃないか。あんたもこっちに来たのかい。」

「ああよくわからんうちにな」

「off “ というゲームから抜け出してまさか自分達の意味で話せるのは驚きだな」

☒

バツター達が首を傾げていると今度は激しく戸を叩く音が聞こえる。

「お客さんが来たようだな」

バツターは戸を見ながら相手をみる。その影は人には似ても似つかなかったが…



「最近噂の亡霊かな？」

バッターは戦闘態勢に入り勢い良く戸を開ける。香霖堂の周りには亡霊が取り囲むように浮かびその後ろにはグールの群れがいた。

「流石に4対この人数は不利だな」

「H H H H H A お困りかいバッター 手伝おうか？」

ザツカリーは先ほどの仮面とは別の猫の仮面をつけていた。そのほかにも羽が生え剣を持っているという違いがあった。

「さあ今まで通り敵を殲滅しようじゃないか」

二人は亡霊達の群れに飛び込み確実に浄化していく。

「しかしまあこのタイミングでこんなに集まってくるなんて、本当ゲームみたいだな」

そう言いながらザツカリーは一枚の紙を取り出す。

商人「たった一人の協力者」 ザツカリーがそう叫ぶとザツカリーの周りにチケツトやバットといったアイテムが出現する。出現したアイテムはザツカリーの周

りを飛行しながら広がったり狭くなったりを繰り返している。

対するバッターはアドオンを使いながら多くの亡霊を蹴倒していく。グールを合わせて百近い数があったが二人によって数を減らし、残りの者達は逃げ出してしまった。

「逃げられたか……」

「とりあえず話は出来るな」

「ああ 説明を頼む」

「実はお前が世界のスイッチを切った後、世界に異変が起こってな。亡霊やグールのほかにもいろいろな奴らがこつちに流れ込んできたらしい。その他にも様々な世界の主人公や怪物なんかもな」

「つまり俺がスイッチを切ったせいでこつちに来ているというわけか」

「俺たちはその流れ込んできた奴らを倒すために呼ばれたらしい。第一俺が来たのはあんたより後だけだな」

「ひとまず状況はわかった。」

「さすが仕事の鬼、理解が早い」

「とりあえずこの話は後にして少し休もう。元の世界よりは落ち着けるだろうから」

所変わって外の世界

☒? 「エフェクトは集まった。夢の中の皆んなに話はした。うろねえも行って言った。もう終わろう…」

TV「今日、〇〇市〇〇町と△△市△△町のアパートに住む——と——が行方不明になりました。近隣の住民から二人がアパートのベランダから転落したと言う情報警察が届けられましたが遺体は見つかっておらず僅かな血痕だけが残されていたそうです。警察では何者かが死体を持ち去ったか誘拐事件として捜査を続けています…」

## 幻想入り人物（off）

NO. 1 バッター

能力 色彩を奪う程度の能力

二つ名 仕事の鬼、狂える浄化の化身

能力説明

簡単に言うとは攻撃を加えた相手の能力を封じたり効力を無くしたりする能力、世界の柱となっている人物の力を奪えばその世界に住む生命を消す事も出来る。

キャラ説明

世界を浄化するという任務を務めていた男。

自分に従うアドーオンと共に the roomのスイッチをoffにした後、八雲紫によって幻想郷にたどり着く。

NO. 2 デーダン

能力 時を加速させる程度の能力

二つ名 厳しき憤怒の守護者

## 能力説明

一時的に自分の周囲の時を加速させる能力。

生物には効果が無いが投げナイフや針のスピードを上げる他、少しの間なら止まった時間の中でも動ける。本人はあまりその事は自覚していないが…

## キャラ説明

ZONE1を守護する存在だった大男。

人間のような容姿に頭の半分程を占める大きな口と牙を持つ。バッターによって一度は死した身で、虚無にいた所突然幻想郷にやってくる。大変口が悪く暴言も多いが、優しい一面もある。ZONEには自分の人生をかけていたのでそれを消したバッターにはかなり恨みを持っている。

## NO. 3 ザツカリー（ニヤツカリー）

能力 アイテムを売る程度の能力

二つ名 しがいないきアイテム商人 猫面の相談者 ヒキガエルの王様

## 能力説明

文字通りアイテムを作って売る能力。ゲームの様に客を先回りして物を売る様な転移系の力もあり、自分が知っているアイテムなら作る事が可能。けれどお金を使った

錬金術の様な物なのでもらうか自分の所持金を使うしか無い。

### キャラ説明

蛙の仮面を被った商人。バツターよりも先回りをしてアイテムを販売するなどバツターの浄化活動を支援していた。

新たに商売を始めるため幻想郷を訪れ、香霖堂の店主と合同で商売を始める。本人の戦闘能力は高く戦闘下では猫の仮面を被る事が多い。八雲紫との接点等は不明だが、幻想郷についてもかなりの知識を持つ。

くおまけく

バツター&アドーオンの技

バツター

ワイド・アングル…相手の特徴を見抜く技

怒りのホームラン…低威力の打撃技、小弾程度

スペシャルホームラン…中威力の打撃技、中弾程度

狂おしき走塁…ダッシュ技、中弾程度

マジックホームラン…高威力の打撃技、大弾程度 外れやすい

アドーオン

飽和鎖：低威力の攻撃 アルファが使用

不可能な抱擁：相手を麻痺させる打撃 アルファが使用

最適化ファイルタ：ランダムで変わる打撃技 オメガが使用

放射状ファイルタ：レーザー攻撃の防御貫通 オメガが使用

超現実的悲劇：範囲攻撃 エプシロンが使用

不可逆劇：仲間のスピードを上げる技 エプシロンが使用

## 第五話 厄日

〔紅魔館門前〕

美鈴は悩んでいた。本来侵入者として対処すべき者を主人の命で従者の一人として迎えるのだから当たり前ではあるが…。

「お嬢様の気まぐれですかね」

一応、咲夜からは方が一の場合の処罰は伝えられていたが肝心なそうだった理由は言われていないのである。

そんな日が続きはや二日、相変わらずの昼寝で咲夜に怒られ、デーダンからはかなり怒鳴られた。そんな日の昼頃、再び面倒事になった。お嬢様の親友の本を盗む泥棒（魔理沙）が現れたのだった。

「またお邪魔するぜ」

「ふざけないでください!!?ただでさえ厳しい人が増えてまともに休めてないのに」

「そんなこと知らん、私には関係ないぜ」

そう言うのと例の如く美鈴はマスパで吹き飛ばされる。

そうして魔理沙は門に入って行く。



「今日も頂いて行くぜ……うわあああ」

門の内側まで入ったはずの魔理沙が鈍い飛行音と共に外に放り出された。

「全く休憩から帰ってきたら侵入者か？おい」

魔理沙はデーダンによって投げ飛ばされていた。

「デーダンさん、ありがとうございませう……痛っ」

「俺をぶん殴った時の力はなんだったんだ。……そのクソガキ、この館に俺がいる間侵入者は許さねえからな、覚えときな」

「私だけでも来ないで下さい」

「今日は勘弁してやるぜ」

そう言い残すと魔理沙は空へ舞い上がり逃げる。

「今日は諦めがいいですね。なんかあったんでしようか？」

「先に仕事をしつかりしろ」

く人里近辺上空く

「全く今日のはあんまり運が良くないな。実験は失敗して家に風穴空くし盗みには失敗するし……」

魔理沙は今日の運の無さを恨みながら空を飛ぶ。すると人里より少し離れたところ

に何かがゆっくり落ちて行くのを見つめる。

「なんだあれ…飛○石か？ラピュ○を見つめるチャンスか」

飛ぶ方向を落ちる物体に向け箒を飛ばす。

「ここら辺に落ちた筈だが…どこだ」

周囲を見渡しても何も無いいつもと変わらない風景が広がるだけである。

「もうちよつと先か？」

そう言いながら辺りを調べると人が倒れていた。ツインテールのはらわた色の服を着た女の子が…

「こいつ生きてんのかな、おーい大丈夫かー」

魔理沙は少女に問いかける。

「うーん…ポニ子ちゃんダメ…先生もう白目向いてる…」

「なんだ、人間だったのか。容姿からして外来人だな…仕方無いあいつの知り合いかもしれないし一応連れて行くか」

く人里く

「バツター 居るか？」

「ああ魔理沙か。中にいる、入ってこい」

「邪魔するぜ」 「さつきそこで外来人を見つけたんだ。もしかしたらお前の知り

合いかもしれないと思つてな、連れてきたんだ」

バッテリーはバッテリーの手入れを中断して魔理沙の元に行く。

「残念だが俺のいた世界にはこの年の子供はいなかった。おそらくザツカリが言つていた他の世界の者達の一人だろう」

「そうか、流石に私の家は今住める状態じゃないしな」

「慧音に頼つてみるというのはどうだ」

「ナイスアイデアだな」「俺も行こう」

二人は寺小屋に向かう。

「慧音頼みたいことがあるんだがいいか？」

「お前の事だ。駄目と言つても無理やり聞かせるんだだろう」

「わかつているじゃないか」

く少女説明中く

「…という訳なんだぜ」

「だいたいわかつた…その子はうちに止めるとしてバッテリー、生活は慣れてきたか？」

「だいたい慣れてきている」

「よかつた。また生肉食べてるんじゃないかと心配しているんだからな」

「ちよといいか 目を覚ましそうだぜ」

少女はゆっくりと身体を起こし周囲を見渡す。

「ああ生きてる…せっかくもうずっと夢の中に入れると思つたのに…」

☆ほうちよう☆

バッター以外「!?」「これがこいつの能力か。」

「現実でも刺せば消えるよね…」

少女は突如現れた包丁を真つ直ぐ近くにいた魔理沙に突く。

「アルファ 飽和鎖」

バッターのアドーオン「アルファ」から鎖が放たれ少女の腕に絡みつく。しかし少女はもう片方の手で包丁を持つと鎖とアルファを切りつける。アルファは黒くなり機能を停止させる。

がバッターの拘束の合間に接近していた慧音は寺小屋で授業でふざける者に放つ伝家の宝刀を抜く。その名も頭突き…。「タコス!!?」

少女はそのまま床に倒れこむ。

「ふう…とりあえず鎮圧はできたな」「死んでないよな…これ」

〜10分後〜

「ハッ…ここはどこ」 「生きてたわ よかった」

「ここは私の家兼寺小屋、あなたが倒れてたのをあの魔女の方が連れてきたの。あな

た名前は？」

「窓付き…ついさつきまでの記憶は飛んでいるけど他の事は覚えてる。私ベランダから飛び降りた筈なのに…なんで生きてるの…」

(紫の仕業だな)「ここは貴女のいた世界とは違う世界、幻想郷。よかつたら元の世界に戻る事も出来るけどどうする？」

「いい…ろくな人生送ってきた訳じゃないから…」

「お前とは真反対だな」「俺だって任務以外の行動などほとんど出来なかつたぞ」「済まんかつた」

「お前たち、この子は私が面倒を見るから心配しなくても大丈夫だからな!!？」

「よろしく頼むぜ」「また来る」

魔理沙とバツターは寺小屋から外に出て話をする。

「ザツカリーなら奴について知っているかもしれないがその前にその紅魔館という場所に行かなくてわ」

「気をつけていけよ。私が忍び込もうとしたら言つてた外来人にぶん投げられたからな」

「話をしに行くだけだ。大丈夫だろう」

「一応忠告はしたからな」

## 第六話 虚ろと狂気

～人里～

「こんれだけ用意したら大丈夫だろう」

バッターは明日紅魔館に行くための準備をしていた。

「もうそろそろ休むことにするか」

バッターは前の世界では取ることはあまりなかった睡眠を取った。

・  
・  
・

～バッターの夢の中～

「よう。初めましてだな。アリス」

「何者だ□貴様、俺はアリスでは無い」

「いや、アリスはアリスだけ。俺が言うんだからな!!？」

そこに立っていたのは猫のような人物だった…

「訳の分からない事を言うな、亡霊め。この俺が浄化してやる」

バターが猫を攻撃するためにバットを振り上げるが：バターのバットは始めから無かった様に消えてしまう。

「まあ落ち着けよアリス、俺はお前が何者か知ってるしただの夢さ」

「貴様…何者だ」

「俺はチャシヤ猫。夢の中の生き物さ、さつき俺を殺そうとしたがあんたは夢を殺せるかい？」

「無理だ。」

「だろ。俺を殺せるのは夢を住処にする奴か同じ夢の住人くらいさ」

「その夢の住人が俺に何の用だ」

「話が早いな。アリスにはただこの世界をめちゃくちゃにしてもらいたいのさ。」

そう言うのとチャシヤ猫はバターに近づく。

「前のセカイを消したアリスにはちようどいい役目だろ？」

「ふざけるな!!? もう俺は誰かに操られたりしない。任務のためだけに本当に大切にすべき者を自ら死なせた俺に更にこの世界住む者の幸せを打ち壊せというのか☒」

「あんたにとつたら悪い話じゃ無いと思うけどな。俺たち b a t の住人はそうなる者だろ?」

「消えろ!!? バットが無くとも貴様を浄化する事は出来る」

そう言うのとバッターは巨大な怪物、人形師達には bat batterと言われた姿になる。

「わかったよ。消えさせてもらうぜ」

チャシヤ猫はバッターの死角部分に消える。

「その姿は俺たちにそっくりだぜ、アリス。いい夢を」

姿は見えないが声だけがその場に木霊する。そうしてバッターは夢から覚める。

「なんだったんだ…今の夢は」

バッターはそう言うのと静かに起き家の外に出る。

「少し気分転換に行くか。」

バッターが人里の外に行くための門の近くまで行くと見慣れた人物と知らない少女を見つめる。

「慧音、誰か来るぞ」

「ああ彼は知り合いだ、おーいバッターどうした？」

「慧音…いやただ奇妙な夢を見てな。気分転換だ」

「へー彼が慧音の言ってた男か」

「慧音、彼女は誰だ？」

「彼女は藤原妹紅、私の友人だ」



「よろしくバツター、あんたの事は慧音から聞いているよ」  
「ああよろしく頼む」

お互いに挨拶を交わし、話を再開する。

「なあ妹紅お前…どこかで会ったことあるか？」

「いや会ったことはないが、突然どうした？」

「気のせいだと思うが俺の導き手の友人に顔が似ていると思ったただけだ」

「あつ…多分気のせいだと思う…」

「そうだ、バツター あれから窓付きが暴れ出す事は無くなったぞ」

「そうか、また何かあったら言ってくれ」

「まあ かなりの時間を眠って過ごしているけどな」

く窓付きの夢の中く

「ヘクシヨン…先生ティシユ持っていない？」

「持っていないですねえ。タオルで拭きますか？」

「そうする…」

窓付きが拭いている間、先生は話をする。

「今朝は大変な目に遭いましたよ…」

「まさか先生がすつ転んで私にのしかかるなんて予想出来なかったけどね（嬉しかった

けど……)」

「何かいいましたか？」

「別に？　　そういえばうろ姉からなんか連絡あつた？」

「彼女も生きてるみたいですよ、今はなんか竹林の中の屋敷の主人と暮らしてるみたいですよ」

「やつぱり、その他には？」

「暗闇の世界に見知らぬ人物がいるらしいですね……髪は金髪なんですけどポニ子さんでもうろつきさんでも無いみたいです」

「新しい子かなあ……見に行ってみようかな」

「今から行きますか？」

「うん……じゃあまた来るね」

窓付きはエフェクト「☆めだまうで☆」をつかい扉の間に向かう。

「いつも思いますけどあのエフェクトだけはけっこう怖いですよね」

く 暗闇の世界く

「新しい子はどこにいるのかなあく」

窓付きは暗闇の中を探索し続けていると、先生の言っていた人物に出会う。彼女は確かに金髪で見た事はない子で羽が生えていた。そして何より……うつ伏して泣いていた。

「あなたは誰……ここは私の夢だよ……」

「いや……私の夢なんだけど……」

少女はゆっくり窓付きを見ると話をする。

「暗闇の中に一人なんて現実と同じだからきつと私の夢だと思ってたけど違うんだ」

「私は窓付きよ、あなたの名前は？」

「フラン……フランドル・スカーレット」

「フラン、あなたも毎日同じ夢を見るの？」

「昨日初めて見たの……今日と同じ夢」

「そう……じゃああなたについて教えてもらえる？」

「わかった……じゃあ」

く吸血少女説明中く

「そうなんだ……495年間ずっと地下に閉じ込められてたんだ」

「うん。だから友達もいなくてお姉様にも話してもらえなくて……寂しいの」

「紅魔館だっけ。（確かあの人が行くって言ってたっけ）」

「私会いに行くよ」

「ダメだよ！私が窓付きを壊しちゃうから」

「大丈夫。それに……こうして夢が繋がった時点でもう友達でしょ？」

「!!?……うん！」